Nagoya J. Health, Physical Fitness, Sports Vol.31, No.1 (March 2008)

大学運動選手の危機事象

Crisis in University Athletes

竹之内　隆　志*　　奥　田　愛　子**　　大　畑　美喜子***

Takashi TAKENOUCHI*　Aiko OKUDA**　Mikiko OOHATA***

This study examined the crises occurring in athletes' life history, athletes' coping with crises, and the degree of resolving crises. University athletes (100 males, 55 females) were asked their experience of crises in the athletic domain and the daily life domain. Subjects' descriptions about experience of crises were analyzed, and 22 crisis issues in the athletic domain and 17 crisis issues in the daily life domain were extracted. The crisis issues in the athletic domain that many athletes experienced were skill stagnation, relationships with teammates, injuries, relationships with coaches, leadership, losing the games, conflicts between team goals and one's own needs, team management, having other things to do, and continuation in athletics. The crisis issues in the daily life domain that many athletes experienced were choice of high school/college, relationships with friends, studying, love, future occupation/life course, and habit. The crisis issues that males and females experienced most frequently were skill stagnation and relationships with teammates, respectively. The frequency of crises in interpersonal issues and physical issue was higher for females than males. The degree of coping with crises and resolving crises was different according to the kinds of crises.

序論

運動選手のパーソナリティについては多くの研究がなされてきた。しかし従来の研究の多くは、運動選手と非運動選手、競技レベルや競技経験年数の異なる選手、あるいは種目の異なる選手にパーソナリティ・テストを実施し、テスト得点を比較するといった表面的な検討に留まり、運動選手のパーソナリティが発達していくメカニズムについてはあまり検討されていない(杉原、1985；杉浦、2001；鈴木・中込、1988)。

こうした問題を解決するために、運動選手が遭遇する危機経験に着目しながら運動選手のパーソナリティ発達を検討する研究が行われるようになってきた。例えば、中込ほか（中込・鈴木、1985；中込・吉村、1990;鈴木･中込、1985、1986）は、危機（crisis)、探求･努力（exploration)、自己投入（commitment）という３つの経験に着目しながら大学運動選手の自我同一性形成過程について検討している。危機とは、個人にとって意味のあるいくつかの可能性を選択しようと迷ったり悩むことである。探求とは、迷いや悩みの解決に向けて探求・努力することである。自己投入とは、自己の選択に対して関心を示したり努力することである。そして、運動部活動や日常生活での危機、探求、自己投入の経験が、大学運動選手の自我同一性形成や自我機能の強さに関連することを明らかにしている。同じように竹之内ら（2006）は、運動部活動や日常生活での危機、探求、自己投入の経験が、中学ならびに高校運動選手の自我発達に関連することを明らかにしている。また杉浦（2001、2004）は、危機や転機の経験と大学スポーツ選手の心理的成長を検討し、危機経験がスポーツや自分自身に対する考え方を変化させる転機となり心理的成長が促進されることを明らかにしている。さ

*　名古屋大学総合保健体育科学センター
**　びわこ成蹊スポーツ大学
***　愛知教育大学
*　Research Center of Health, Physical Fitness and Sports, Nagoya University
**　Biwako Seikei Sport College
***　Aichi University of Education

らにStambulova（2000）は、危機とは発達における転機であり、危機の経験とそれへの対処行動によって運動選手の心理的成長が期待できると示唆している。

これらの研究より、運動部活動や日常生活で危機を経験し、さらに危機への対処行動を起こすことで運動選手のパーソナリティが発達するといったメカニズムが示唆される。しかしながら、さらに運動選手のパーソナリティ発達のメカニズムを明確にするには、どういった事象において危機を経験することが重要なのかを明らかにすることが必要である。こうした点については、例えば竹之内ら（2006）は、中学ならびに高校運動選手の自我発達には、「チームメイトとの関係」「指導者との関係」「競技成績」などの運動領域での事象および「勉強」「将来の職業や進路」「生き方や価値」「部外の同性の友人」などの日常生活領域での事象において、危機を経験したり対処行動を起こすことが重要であることを明らかにしている。このようにパーソナリティ発達に重要となる危機事象についても検討が加えられてきているが、従来の研究では研究者が主観的に選択した事象が検討されることが多く、そのため運動選手が遭遇する危機事象を網羅したうえでの検討になっているかは定かではない。また、どの種の事象に対してどのくらいの人が危機を経験しているのか、あるいは危機の経験に性差が存在するのかなどといった点についてはあまり明確にされていない。

以上のことから本研究では、大学運動選手を対象にして危機経験の調査を行い、危機事象の分類を試みる。そして、男子と女子においてどのような事象が危機として経験されやすいのか、また、どのような危機事象が最も重篤なものとして経験されるのかということについて検討する。さらに、危機事象に対する対処行動と解決の状況についても検討する。

方法

1．対象者および調査時期

大学運動選手166名を対象者として、平成18年12月から平成19年１月の間に大学の授業を利用して調査を行った。対象者のうち危機についての回答に記入漏れのみられた者を除き、男子100名（１年生42名、２年生31名、３年生16名、４年生９名、不明２名）および女子55名（１年生20名、２年生19名、３年生12名、４年生３名、不明１名）を分析対象者とした。分析対象者の実施種目は個人種目から集団種目まで多岐にわたり、競技レベルも試合経験のない者から全国大会上位の者までが含まれていた。競技経験年数の平均は男子で8.2年、女子で7.6年であった。

2．調査内容

1）危機事象についての自由記述

これまでの運動部活動や日常生活を振り返ってもらい、運動部活動と日常生活の各々について、迷ったり悩んだりした事柄を最大６個まで自由に記述してもらった。

2）最も重篤であった危機事象および対処行動と危機解決の状況

1）で記載してもらった危機事象のうち、最も迷いや悩みが重篤であったものを１つ選択してもらい、さらに選択した危機事象に対してどのような対処行動を起こしたのかを自由記述で調査した。また、最終的に迷いや悩みが解決したのか否かも回答してもらった。

結果および考察

1．危機事象の分類と経験されやすい危機事象

対象者が記述した危機事象を分類し、個々の危機事象を記載した人数を調べ、それらの結果を表１に示した。表１の人数は複数回答を認めたうえでの人数であり、人数の多い順に危機事象を並べて示した。なお表中の記載率は、男子の場合には100名の男子対象者全員のうち個々の危機事象を記載した人数の割合であり、女子の場合は55名の女子対象者全員のうち個々の危機事象を記載した人数の割合を示している。表１に示すように、運動領域では22の危機事象が、日常生活領域では17の危機事象が抽出された。これらの危機事象は先行研究で明らかにされた運動選手の危機事象をほぼ含んでいる。例えば中込（1987）は、運動選手に面接を実施し、危機事象として「対指導者関係」「怪我・スランプ」「高卒後の進路決定」「環境変化」「スポーツの継続」「将来の職業」「現役引退」を抽出しているが、これらの事象は本研究で抽出された事象の中にほぼ含まれている。

次に、経験されやすい危機事象とその性差について検討していくが、それらを分かりやすくするために、表１の危機事象のうち男女ともに10％以上の人が記載した危機事象と男子あるいは女子のどちらかにおいてのみ10％以上の人が記載した危機事象を整理して表２に示した。表２に示すように運動領域の危機事象として男女ともに10％以上の人が記載した危機事象は、「技術の停滞・プレーの不調」「チームメイトとの関係」「怪我」「指導者との関係」「チームをまとめること・士気を高めること」「試合に勝てない・試合で結果が残せない」「部の方針と個人のニーズのずれ」「部の運営」の８つであった[注1)]。これらの事象は男女に共通して経験されやすい運動領域での危機事象と考えてよいと思わ

表１　危機事象および個々の危機事象を記載した人数と記載率（％）

	男子（n＝100）			女子（n＝55）		
	危機事象	人数	記載率	危機事象	人数	記載率
運動領域						
	技術の停滞・プレーの不調	50	50.0	チームメイトとの関係	35	63.6
	チームメイトとの関係	34	34.0	技術の停滞・プレーの不調	28	50.9
	怪我	31	31.0	指導者との関係	20	36.4
	指導者との関係	17	17.0	チームをまとめること・士気を高めること	18	32.7
	チームをまとめること・士気を高めること	16	16.0	怪我	15	27.3
	試合に勝てない・試合で結果が残せない	11	11.0	部活と他にしたいことの両立・選択	12	21.8
	部の方針と個人のニーズのずれ	11	11.0	試合に勝てない・試合で結果が残せない	8	14.5
	部の運営	10	10.0	部の方針と個人のニーズのずれ	6	10.9
	レギュラーになれない・試合に出られない	9	9.0	部活動の継続	6	10.9
	部活動の継続	9	9.0	部の運営	6	10.9
	部活と他にしたいことの両立・選択	8	8.0	レギュラーになれない・試合に出られない	5	9.1
	拘束	8	8.0	やる気が出ない	4	7.3
	種目選択・変更	6	6.0	練習の価値	3	5.5
	やる気が出ない	5	5.0	心理的スキルや心理的競技能力の低さ	3	5.5
	練習のつらさ・厳しさ	4	4.0	種目選択・変更	3	5.5
	心理的スキルや心理的競技能力の低さ	4	4.0	他の選手の指導	3	5.5
	練習の価値	3	3.0	チームにおける自分の役割や存在意義	3	5.5
	体力のなさ	3	3.0	体力のなさ	2	3.6
	ポジションの変更	2	2.0	拘束	1	1.8
	他の選手の指導	2	2.0	ポジションの変更	1	1.8
	練習方法	2	2.0	練習のつらさ・厳しさ	1	1.8
	チームにおける自分の役割や存在意義	0	0.0	練習方法	0	0.0
日常生活領域						
	高校・大学への進学や進路	40	40.0	高校・大学への進学や進路	31	56.4
	部外の友人との関係	27	27.0	部外の友人との関係	24	43.6
	勉強や学習の遅れ	21	21.0	勉強や学習の遅れ	13	23.6
	恋愛	15	15.0	将来の職業や進路	11	20.0
	金銭	13	13.0	身体的問題や体型・体重管理	9	16.4
	将来の職業や進路	12	12.0	恋愛	8	14.5
	生活習慣	12	12.0	家族・家庭	8	14.5
	生き方や価値	6	6.0	生活習慣	6	10.9
	家族・家庭	6	6.0	生き方や価値	3	5.5
	食生活	5	5.0	性格	3	5.5
	健康問題・病気	4	4.0	食生活	2	3.6
	身体的問題や体型・体重管理	3	3.0	バイトの継続	2	3.6
	性格	2	2.0	学校生活	1	1.8
	学校生活	1	1.0	健康問題・病気	1	1.8
	バイトの継続	1	1.0	一人暮らしがしたい	1	1.8
	一人暮らしがしたい	0	0.0	やる気が出ない	1	1.8
	やる気が出ない	0	0.0	金銭	0	0.0

れる。この他、女子においては、「部活と他にしたいことの両立・選択」「部活動の継続」の２つも10％以上の人が記載した危機事象であった。この２つの危機事象は男子では10％の記載率に満たなかったが、表１をみると各々男子の8.0％、9.0％が記載した危機事象となっており、ほぼ10％程度の記載率となっている。そこで前述した８つの事象に加えて、これら２つの事象も男女に共通して経験されやすい運動領域での危機事象と考えてよいと思われる。

このように運動領域において経験されやすい危機事象は男女で共通と考えられるが、表１に示すように男子では「技術の停滞・プレーの不調」が最も記載率が高く、女子では「チームメイトとの関係」が最も記載率が高かった。しかもこれらの危機事象の記載率は２番目の危機事象よりも10％以上も記載率が高く、最も経験される危機事象には性差が存在しているといえる。また、対人関係に関わる事象については全般的に女子の方が男子よりも危機事象として記載される率が高いといった性差もみられている。「チームメイトとの関係」では女子の記載率は男子よりも30％ほど高く、「指導者との関係」と「チームをまとめること･志気を高めること」では女子の記載率は男子よりも20％ほど高くなっている。チームメイトとの関係については、鈴木･中込(1986)や Takenouchi et al.（2004）の研究でも女子の方が男子

表2　10%以上の人が記載した危機事象

	男子（n＝100）			女子（n＝55）		
	危機事象	人数	記載率	危機事象	人数	記載率
運動領域						
〈男女ともに10%以上の人が記載した危機事象〉						
	技術の停滞・プレーの不調	50	50.0	技術の停滞・プレーの不調	28	50.9
	チームメイトとの関係	34	34.0	チームメイトとの関係	35	63.6
	怪我	31	31.0	怪我	15	27.3
	指導者との関係	17	17.0	指導者との関係	20	36.4
	チームをまとめること・士気を高めること	16	16.0	チームをまとめること・士気を高めること	18	32.7
	試合に勝てない・試合で結果が残せない	11	11.0	試合に勝てない・試合で結果が残せない	8	14.5
	部の方針と個人のニーズのずれ	11	11.0	部の方針と個人のニーズのずれ	6	10.9
	部の運営	10	10.0	部の運営	6	10.9
〈男子あるいは女子においてのみ10%以上の人が記載した危機事象〉						
				部活と他にしたいことの両立・選択	12	21.8
				部活動の継続	6	10.9
日常生活領域						
〈男女ともに10%以上の人が記載した危機事象〉						
	高校・大学への進学や進路	40	40.0	高校・大学への進学や進路	31	56.4
	部外の友人との関係	27	27.0	部外の友人との関係	24	43.6
	勉強や学習の遅れ	21	21.0	勉強や学習の遅れ	13	23.6
	恋愛	15	15.0	恋愛	8	14.5
	将来の職業や進路	12	12.0	将来の職業や進路	11	20.0
	生活習慣	12	12.0	生活習慣	6	10.9
〈男子あるいは女子においてのみ10%以上の人が記載した危機事象〉						
	金銭	13	13.0	身体的問題や体型・体重管理	9	16.4
				家族・家庭	8	14.5

よりも強く危機を感じていることが示されており、対人関係に関わる事象については女子の方が男子よりも危機を経験しやすいと考えられる。

他方、日常生活領域の危機事象をみてみると、男女ともに10%以上の記載率であった危機事象は、「高校・大学への進学や進路」「部外の友人との関係」「勉強や学習の遅れ」「恋愛」「将来の職業や進路」「生活習慣」の6つであった。これらの事象は男女に共通して経験されやすい日常生活領域の危機事象と考えられる。ただし、「高校・大学への進学や進路」と「部外の友人との関係」の2つでは女子の方が男子よりも20%ほど記載率が高く、これらは男子よりも女子の方が経験しやすい危機事象と考えられる。さらに「身体的問題や体型・体重管理」と「家族・家庭」は女子においてのみ10%以上の記載率であり、これらの事象も女子において経験されやすい危機事象と考えられる。内田ら(2003)は大学生を対象として、自己の身体的側面への肯定的感情や体型の自己評価は男子よりも女子の方が低いことを明らかにしている。つまり、女子の方が身体的問題を危機的に捉えやすいと考えれられ、そのため「身体的問題や体型・体重管理」は女子においてのみ10%以上の記載率となったものと考えられる。また「家族・家庭」が女子においてのみ10%以上の記載率であったことは、先に考察したように女子が対人関係に関わる事象で危機を経験しやすいということと一致している。その他の性差としては、男子では「金銭」が10%以上の記載率であったが、女子で金銭を危機事象として記載したものはいなかった点があげられる。これには男女の下宿率の差が影響しているかもしれない。対象者のうちの男子69名と女子41名のみの情報であるが、男子では53.6%が下宿生であり、女子では39.0%が下宿生であった。このことから対象者全体としても男子の方が下宿率が高いと推測され、そのため男子において「金銭」の記載率が高かったのかもしれない。

2．最も重篤であった危機事象および危機事象に対する対処行動と解決の状況

経験した危機事象のうちで最も重篤であった危機事象を一つ選択してもらった結果を選択度数が多かった順に並べて表3に示した。選択度数が多かったものを順に4つあげると、男子では「技術の停滞・プレーの不調」を選択したものが17人（17.0%）と最も多く、次いで「高校・大学への進学や進路」「怪我」「チームメイトとの関係」の順であった。女子では、「チームメイ

表3　最も重篤であった危機事象として選択された度数と選択率

男子（n＝100）				女子（n＝55）			
領域	最も重篤であった危機事象	度数	選択率	領域	最も重篤であった危機事象	度数	選択率
運動	技術の停滞・プレーの不調	17	17.0	運動	チームメイトとの関係	10	18.2
日常生活	高校・大学への進学や進路	11	11.0	運動	チームをまとめること・士気を高めること	6	10.9
運動	怪我	10	10.0	日常生活	高校・大学への進学や進路	5	9.1
運動	チームメイトとの関係	9	9.0	日常生活	部外の友人との関係	5	9.1
日常生活	恋愛	6	6.0	運動	技術の停滞・プレーの不調	4	7.3
日常生活	部外の友人との関係	6	6.0	運動	怪我	3	5.5
運動	指導者との関係	5	5.0	日常生活	将来の職業や進路	3	5.5
運動	チームをまとめること・士気を高めること	5	5.0	運動	指導者との関係	2	3.6
日常生活	将来の職業や進路	5	5.0	運動	部活と他にしたいことの両立・選択	2	3.6
運動	試合に勝てない・試合で結果が残せない	4	4.0	運動	部の方針と個人のニーズのずれ	2	3.6
運動	部の方針と個人のニーズのずれ	3	3.0	運動	部活動の継続	2	3.6
日常生活	生き方や価値	3	3.0	運動	練習の価値	2	3.6
運動	部の運営	2	2.0	運動	心理的スキルや心理的競技能力の低さ	2	3.6
運動	心理的スキルや心理的競技能力の低さ	2	2.0	運動	レギュラーになれない・試合に出られない	1	1.8
運動	種目選択・変更	2	2.0	運動	試合に勝てない・試合で結果が残せない	1	1.8
日常生活	家族・家庭	2	2.0	運動	やる気が出ない	1	1.8
運動	レギュラーになれない・試合に出られない	1	1.0	運動	種目選択・変更	1	1.8
運動	拘束	1	1.0	運動	チームにおける自分の役割や存在意義	1	1.8
運動	部活動の継続	1	1.0	日常生活	家族・家庭	1	1.8
運動	練習のつらさ・厳しさ	1	1.0	日常生活	やる気が出ない	1	1.8
日常生活	勉強や学習の遅れ	1	1.0				
日常生活	金銭	1	1.0				
日常生活	学校生活	1	1.0				
日常生活	生活習慣	1	1.0				
	計	100				55	

表4　最も重篤であった危機事象に対する対処行動と解決の有無

危機事象	選択度数			対処行動			解決		
	男子	女子	合計	あり	なし	対処行動率	した	しない	解決率
技術の停滞・プレーの不調	17	4	21	19	2	90.5	13	8	61.9
チームメイトとの関係	9	10	19	11	8	57.9	11	8	57.9
高校・大学への進学や進路	11	5	16	12	4	75.0	12	4	75.0
怪我	10	3	13	10	3	76.9	11	2	84.6
チームをまとめること・士気を高めること	5	6	11	7	4	63.6	5	6	45.5
部外の友人との関係	6	5	11	4	7	36.4	7	4	63.6
将来の職業や進路	5	3	8	6	2	75.0	2	6	25.0
指導者との関係	5	2	7	4	3	57.1	3	4	42.9
恋愛	6	0	6	4	2	66.7	6	0	100.0
試合に勝てない・試合で結果が残せない	4	1	5	5	0	100.0	3	2	60.0
部の方針と個人のニーズのずれ	3	2	5	3	2	60.0	2	3	40.0
心理的スキルや心理的競技能力の低さ	2	2	4	3	1	75.0	1	3	25.0
部活動の継続	1	2	3	3	0	100.0	2	1	66.7
生き方や価値	3	0	3	1	2	33.3	2	1	66.7
家族・家庭	2	1	3	3	0	100.0	1	2	33.3
種目選択・変更	2	1	3	3	0	100.0	3	0	100.0
レギュラーになれない・試合に出られない	1	1	2	1	1	50.0	1	1	50.0
部活と他にしたいことの両立・選択	0	2	2	1	1	50.0	2	0	100.0
練習の価値	0	2	2	2	0	100.0	1	1	50.0
部の運営	2	0	2	1	1	50.0	1	1	50.0
拘束	1	0	1	1	0	100.0	1	0	100.0
練習のつらさ・厳しさ	1	0	1	0	1	0.0	1	0	100.0
やる気が出ない	0	1	1	0	1	0.0	0	1	0.0
勉強や学習の遅れ	1	0	1	1	0	100.0	1	0	100.0
金銭	1	0	1	1	0	100.0	0	1	0.0
学校生活	1	0	1	1	0	100.0	1	0	100.0
生活習慣	1	0	1	1	0	100.0	1	0	100.0
やる気が出ない	0	1	1	0	1	0.0	0	1	0.0
チームにおける自分の役割や存在意義	0	1	1	0	1	0.0	0	1	0.0

トとの関係」を選択したものが10人（18.2%）と最も多く、次いで「チームをまとめること・士気を高めること」「高校・大学への進学や進路」「部外の友人との関係」の順であった。これらの事象は表１の運動領域や日常生活領域の危機事象において上位に位置するものと同じであり、多くの人に経験されやすい危機事象は最も重篤な危機事象ともなりやすいといえる。また、男女ともに運動領域の危機事象が選択度数で１位であったことや、男子においては上位４つのうち３つが運動領域の事象であったことから、運動選手にとっては日常生活での出来事よりも運動領域での出来事の方が迷いや悩みの対象となりやすいものと考えられる。

次に、危機事象に対して対処行動を起こした人と起こさなかった人の数と危機が最終的に解決した人と解決しなかった人の数を集計し表４に示した。表４の危機事象は個々の危機を選択した人の合計人数が多い順に並べてある。また、表中の対処行動率と解決率は各々危機事象に対して対処行動を起こした人の割合と危機が解決した人の割合を示している。選択度数が極端に少ない事象については結果の一般性が低いので分析を控え、選択度数の合計が５以上であった11事象についての特徴を検討していく。これら11の危機事象をおおまかに分類すると、パフォーマンスに関わる事象、対人関係に関わる事象、部の方針に関わる事象、そしてその他に分類できる。

パフォーマンスに関わる危機事象とは「技術の停滞・プレーの不調」と「試合に勝てない・試合で結果が残せない」であるが、これらの事象では対処行動率が各々90.5%と100.0%で非常に高かった。中込・鈴木（1985）や竹之内ら（2006）の研究においても、競技成績に対する危機と対処行動の水準は他の領域よりも高いことが示されており、本研究の結果と一致している。運動選手は日々パフォーマンス向上のために練習していることから、このような特徴については了解可能である。ただし、これらの危機事象の解決率は60%程度であり、解決率はさほど高くない。

対人関係に関わる危機事象とは、「チームメイトとの関係」「チームをまとめること・志気を高めること」「部外の友人との関係」「指導者との関係」「恋愛」である。これらの事象における対処行動率は「部外の友人との関係」で36.4%で、残りの事象ではおおむね60%前後で、他の事象と比べると対処行動率が低くなっている。解決率については「恋愛」を除くと40%～60%程度であり、概して解決率はさほど高くない。中込・鈴木（1985）は、「指導者との関係」については危機解決に向けた模索や働きかけが生じにくいと示唆しているが、指導者との関係のみならず対人的な問題に関しては模索や働きかけが難しいのかもしれない。

部の方針に関わる危機事象とは「部の方針と個人のニーズのずれ」であるが、この事象では対処行動率が60.0%で解決率が40.0%であり、対処行動率も解決率も相対的に低かった。この危機は個人の目標よりも部の目標を優先した練習方法が採られるなどの悩みであるが、運動部ではチームとしての成績が第一に優先される風土があり、そうした方針に疑義を感じたとしてもチームの一員である以上疑義を開示することは難しい。そのため対処行動率も解決率も相対的に低くなったと考えられる。

残りの危機事象は「高校・大学への進学や進路」「怪我」「将来の職業や進路」であるが、これらの対処行動率は75%程度で相対的にやや高く、また「高校・大学への進学や進路」と「怪我」の解決率は各々75.0%と84.6%で相対的にやや高かった。これらの事象は内容は異なるが、他者が関与することなく自分の意志で対処行動を起こすことが可能な事象と考えられる。そのため対処行動率も解決率もやや高くなったものと思われる。ただし、「将来の職業や進路」の解決率は25.0%と低かった。「将来の職業や進路」は将来のことであるので、悩んだとしても実質的な解決には至りにくいといったことが解決率の低さに反映しているものと思われる。

以上のように、危機事象の種類によって対処行動と解決の状況は異なるといえる。

まとめ

大学運動選手に危機経験の調査を行い、危機事象の分類を試みた。また経験されやすい危機事象、最も重篤であった危機事象、そして危機事象に対する対処行動と解決の状況について検討した。その結果、運動領域では22の危機事象が、日常生活領域では17の危機事象が抽出された。男女に共通して経験されやすい運動領域での危機事象は、「技術の停滞・プレーの不調」「チームメイトとの関係」「怪我」「指導者との関係」「チームをまとめること・士気を高めること」「試合に勝てない・試合で結果が残せない」「部の方針と個人のニーズのずれ」「部の運営」「部活と他にしたいことの両立・選択」「部活動の継続」であった。男女に共通して経験されやすい日常生活領域での危機事象は、「高校・大学への進学や進路」「部外の友人との関係」「勉強や学習の遅れ」「恋愛」「将来の職業や進路」「生活習慣」であった。最も多くの人に経験された危機事象は、男子では「技術の停滞・プレーの不調」で、女子では「チームメイトとの関係」であった。また、対人関係や身体的問題に関わる事象については女子の方が男子よりも危機を経験

しやすいと考えられた。最も重篤な危機事象として選択された割合が高かったものは、男子では「技術の停滞・プレーの不調」「高校・大学への進学や進路」「怪我」「チームメイトとの関係」などで、女子では「チームメイトとの関係」、「チームをまとめること・士気を高めること」「高校・大学への進学や進路」「部外の友人との関係」などであった。危機事象に対する対処行動と解決の状況は、危機事象の種類によって異なると考えられた。今回の分析では危機事象への対処行動と解決の状況を有無といった２分法で検討したが、どのような対処行動を起こし、どのように解決したのかといった経験の質を把握していくことが必要であり、そうした質を加味したうえで運動選手の危機の経験とパーソナリティ発達を検討していくことが今後の課題である。

付記

本研究は、文部科学省科学研究費補助金（18500475）の交付を受けて行われた。

注

注１）これらの事象のうち「部の方針と個人のニーズのずれ」と「部の運営」は内容が分かりにくいと思われるが、「部の方針と個人のニーズのずれ」とは“自分の目標とチームの目標が違う”“練習に対する自分と周りの人の考え方が違う”“自分の練習時間が少ない”などの記述を総称したものである。また、「部の運営」とは“練習の機会を全員に与えること”“練習計画の立案”“部員が少なく練習ができない”“指導者がいない”などの記述を総称したものである。

文献

中込四郎（1987）運動選手の自我同一性の探求とスポーツ経験（Ⅴ）：運動選手の成育史における危機的場面．筑波大学体育科学系紀要，10：43－51.

中込四郎・鈴木　壮（1985）運動選手の自我同一性の探究とスポーツ経験（Ⅰ）：Erikson の相互性からみたスポーツ経験の特徴．体育学研究，30：249－260.

中込四郎・吉村　功（1990）過去の危機様態における相互性の程度と自我機能：ロールシャッハ反応に投影された自我の強さ．筑波大学体育科学系紀要，13：47－56.

Stambulova, N.B. (2000) Athlete's crises: A developmental perspective. International Journal of Sport Psychology, 31: 584–601.

杉原　隆（1985）幼児の運動あそびに関する有能さの認知とパーソナリティの関係．体育学研究，30：25－35.

杉浦　健（2001）スポーツ選手としての心理的成熟理論についての実証的研究．体育学研究，46：337－351.

杉浦　健（2004）転機の経験を通したスポーツ選手の心理的成長プロセスについてのナラティブ研究．スポーツ心理学研究，31（１）：23－34.

鈴木　壮・中込四郎（1985）運動選手の自我同一性の探究とスポーツ経験（Ⅱ）：競技レベルの低い選手と高い選手の比較．岐阜大学教育学部研究報告（自然科学），９：89－98.

鈴木　壮・中込四郎（1986）運動選手の自我同一性の探究とスポーツ経験（Ⅲ）：性差の検討．岐阜大学教育学部研究報告（自然科学），10：61－71.

鈴木　壮・中込四郎（1988）スポーツ経験による人格変容に関する研究展望．岐阜大学教育学部研究報告（自然科学），12：59－72.

Takenouchi, T., Taguchi, T., and Okuda, A. (2004) Relationship of sports experience and ego development of adolescent Japanese athletes. Psychological Reports, 95: 13–26.

竹之内隆志・田口多恵・奥田愛子（2006）中学ならびに高校運動選手のパーソナリティ発達：自我発達を指標とした検討．体育学研究，51：757－771.

内田若希・橋本公雄・藤永　博（2003）日本語版身体的自己知覚プロフィール：尺度の開発と性および身体活動レベルによる差異の検討．スポーツ心理学研究，30（２）：27－40.

（2007年12月28日受付）